



ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間
SINCE 2020

Close up

ウポポイを楽しもう！ ～内覧会体験レポート～

2020年7月12日(日)、「民族共生象徴空間」、愛称「ウポポイ」が開業しました。皆さんはもう出かけてみましたか？

ウポポイはアイヌの歴史や伝統、文化などを五感で体験できる空間です。そこにはアイヌ文化の奥深さや、ルーツが違う人々が互いに尊重して共生する社会、自然とともに生きることの尊さなど、さまざまな学びがあります。

開業直前の7月9日、報道関係者向けの内覧会が行われ、一足先にウポポイを体験することができました。ここではその内覧会をレポートします。すでに訪問した人はウポポイの魅力の再確認を、まだ出かけていない人は自分なりの見どころを探して、楽しさを倍増させるきっかけにしてみませんか。

迫力ある伝統芸能と映像アニメーション

～体験交流ホール～

入場ゲートを通して、最初に訪れた施設は、アイヌの伝統芸能などが上演される体験交流ホールです。

「ウポポイは(当初の予定から)2カ月半ほど遅れて、ようやく開業することになりました。この間、新型コロナウイルス対策をどのようにしっかり構築するかということで準備してまいりました。ウポポイにはアイヌの文化を伝承していくこと、それから新しいアイヌの文化を創造・発展させていくという大きな目標があります」と、運営本部長で(公財)アイヌ民族文化財団の対馬一修副理事長の挨拶がありました。

ウポポイでは、アイヌ語が公用語として使われています。施設名の掲示も「体験交流ホール」と「ウエカリチセ」のように、日本語とアイヌ語と一緒に併記され、

これは他の施設も同じです。

スタッフは、「ポンレ」と呼ばれるニックネームで呼び合っています。体験交流ホールでは、「割れヒゲ」を意味する「ペンレク」さんと「6つの仮小屋」を意味する「イワンクチャ」さんが司会を務めていましたが、ポンレは外見の特徴やその人のエピソードなどから付けられているそうです。

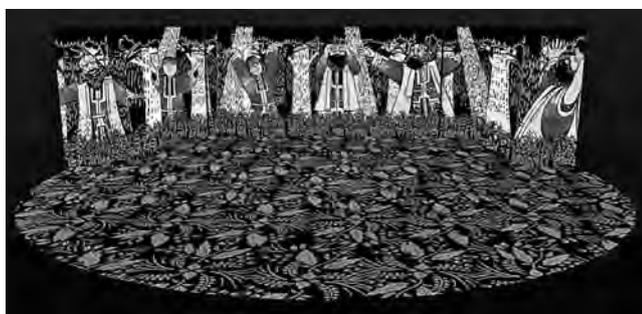
ここで上演される伝統芸能は、道内各地に伝わるアイヌの古式舞踊などをそれぞれの地域で伝承している人から教えてもらったものや、古い映像や音声から復元して完成させたものです。この日は、アイヌの楽器として知られているムックリの演奏のほか、帯広に伝わる「サロルリムセ」や、白老に伝わる「イオマンテリムセ」な



鶴が羽ばたく様子を演じる「サロルリムセ」



美しい映像とともに奏でられるムックリ



短編映像「カムイ ユカラ」の「キツネにつかまった日の神」のワンシーン

どが披露されました。サロルンとは鶴のことで、親鶴が子鶴に羽ばたき方を教えて、一緒に大地から羽ばたいていく様子を表した踊りです。イオマンテリムセは、動物の魂をカムイ（神）の世界に送り出す儀式イオマンテや祝いの席で楽しむために踊るものです。たくさんの歌をつないで展開され、歌に合わせて踊りが変化していく様子が見どころです。

いずれもバックスクリーンや床に効果的な映像が映し出され、舞台全体を使った洗練された演出に驚かされます。それぞれの動きやしぐさにどんな意味が込められているのかを考えながら見ると、想像も膨らみます。

体験交流ホールでは、短編映像「カムイ ユカラ」も上映されました。伝統芸能同様に、スクリーンだけでなく床まで使って映し出されるアニメーションで、アイヌに語り継がれる物語を立体的な映像で楽しめます。「キツネにつかまった日の神」と「カムイを射止めた男の子」の2作品があり、ダイナミックな演出でアイヌに伝わる物語を鑑賞できます。

体験交流ホールでは、背景のスクリーンがないときの窓から見える景色にも注目です。ポロト湖やコタンにあるチセ（家）が望めるようになっていて、一枚の絵のような眺めが広がります。

アイヌの食文化を味わう～エントランス棟周辺～

続いて向かったのはフードコートやレストラン、ショップなどがあるエントランス棟です。入り口から、ゲストを迎えてくれる「いざないの回廊」、エントランス棟までは無料ゾーンなので、食事や買い物だけの利用もできます。

ちょっとぜいたくしたいときは、地元の白老町虎杖浜で「心のリゾート 海の別邸 ふる川」を展開する(株)ぬくもりの宿ふる川が運営するレストラン「焚火ダイニング・カフェ ハルランナ」へ。エントランス棟内にあり、ポロト湖をのんびりと眺めながら、アイヌの食文化と北海道の豊かな食材を組み合わせ、現代の調理技術を取り入れた創作料理が味わえます。



「焚火ダイニング・カフェ ハルランナ」のコース。エゾシカ肉が味わえる

フードコートでは、エゾシカ肉の串物やギョウジャンニク入りのつくねなど、アイヌ文化と地元食材を生かしたメニューが提供されていて、テイクアウトもできます。

このほかオハウ（汁物）や軽食、ドリンクを提供する「カフェ リムセ」、「クンネチュヤ」という月を意味するアイヌ語をネーミングに採用したカップチーズケーキが看板メニューの「スイーツカフェ ななかまど イレンカ」が、エントランス棟の手前にあります。

ショップ「ニエパイ」には、オリジナル商品やアイヌ



文様入りのごぎ「チタラベ」の模様をイメージしたパッケージの「ツキサップあんぱん」

の民・工芸品、北海道のお土産がそろっています。ウポポイ開業に合わせたオリジナルパッケージが目を引き「ツキサップあんぱん」は、札幌ではおなじみの「月寒あんぱん」を製造販売する株式会社

ほんまの商品。アイヌ語が由来のかつてのネーミングを復活させました。

ほかにもウポポイを応援する企業のお菓子や、アイヌ文様が美しくデザインされた焼き物など、個性ある品ぞろえになっています。

楽器やアイヌ語に親しむ～体験学習館～

ウポポイでは、体験しながらさまざまなアイヌ文化を学ぶことが一つの特徴です。

続いて訪れた体験学習館では、アイヌ料理の調理や試食、アイヌの楽器演奏など、実際に触れて体験するプログラムを準備していましたが、新型コロナウイルス感染症対策のため、これらの内容を変更し、開業からしばらくはアイヌの楽器紹介と演奏、小さな紙人形劇「ポン劇場」が披露されています。

アイヌの代表的な楽器、トンコリやムックリの解説とともに、スタッフによる演奏が楽しめ、ときにはみんなで踊るプログラムなども予定しているそうです。



トンコリの解説

この日は、トンコリの解説の後で、鳥が湖に舞い降りる曲「トーキトランラン」など数曲が演奏されました。

ポン劇場はオリジナルの紙人形劇をとおして、アイヌ語や文化に触れることができるプログラムです。アイヌ語による童話のお話し会やアイヌに伝わる物語、

料理などを紹介しています。

この日は、「メトット」さんが、フチ（祖母）から教わった「ヤイサマネナ」を、フチの思い出とともに語ってくれました。「ヤイサマネナ」とは、哀しみや異性に対する恋心など、自分の心のうち

を女性が歌で表したものを指します。昔は個人が歌詞やメロディを持っていたそうですが、今ではそれが地域の人たちによって伝承され、共有の歌として歌い継がれています。心情あふれる歌とともに、フチの思い出話に涙が出てしまいそうになりました。

メトットさんは最後に「アイヌ文化は生きている文化だということを感じてほしい」と話しかけてくれました。歴史や伝統、文化を語り継いでいくことの大切さを実感しました。

体験学習館には、一人一人がドーム型スクリーンの前に座って、映像が楽しめるプログラム「カムイ アイズ」もあります。アイヌ文化ではカムイは動物の姿になって人間の世界、アイヌモシリにやってくるとされています。そのカムイの視点から見える大地をパノラマ映像で鑑賞できるプログラムです。

大空から大地を眺めるオオワシが主役の「カパッチリの旅」と、大地を駆け巡るキタキツネが主役の「チロンヌアの旅」の2つがあり、オオワシは空から、キタキツネは地からという、対照的な視点で撮影されています。スピード感と迫力ある映像は、手に汗を握るような緊張感があります。



ポン劇場でフチの思い出とともに「ヤイサマネナ」を披露したメトットさん



「カムイアイズ」のワンシーン

暮らしをのぞいてみよう！～伝統的コタン～

次に向かったのは、昔のアイヌの生活空間を体感できる伝統的コタンのエリアです。奥には伝統的な家屋のチセが並んでいます。チセは地域によって使っている素材などの違いがあり、ここでは地元、白老のチセが再現されています。解説してくれた「ピロマ」さんは、構造や特徴、他の地域との違い、チセでの暮らしなどについて教えてくれました。



伝統的コタンには4棟のチセが並ぶ



中央にいろりが設けられているチセの内部

白老では東側に神様がいると考えられていたため、神窓と呼ばれる窓が東側に設けられ、中央にはいろりが設置されています。いろりは、人がいる限りずっと焚きつづけていますが、それは火が最も身近な神様「アペフチカムイ」であるからです。狩りに出かける時、狩りから帰ってきたときには、必ず神様にお祈りをしたといいます。

このほか伝統的コタンでは、実際のチセづくりが公開されているほか、屋外ステージでの「コタンの語り」、仕掛け弓や丸木舟操舟の実演・解説などのプログラムがあります。

6つのテーマからアイヌを知る

～国立アイヌ民族博物館～

最後に向かったのは、ウポポイの中核施設の一つ「国立アイヌ民族博物館」です。エスカレーターで2階に上がると、大きな窓からポロト湖を望む絶景が目に飛び込んできます。ここはパノラミックロビーと呼ばれていて、ぜひ一息ついてウポポイの全景を眺めてほしいビューポイントです。

基本展示室は「私たちのことば」、「私たちの世界」、「私たちの暮らし」、「私たちの歴史」、「私たちのしごと」、「私たちの交流」という6つのテーマが設けられています。円形に配置されているプラザ展示には6つのテーマの代表的な資料が展示されたケースがまわっています。時間がない人はここをチェックしてから興味のあるテーマのエリアを掘り下げて見ていくと、時間が有効に使えます。



6つのテーマを円形に配置した国立アイヌ民族博物館

中でもアイヌの世界観や宗教観を実感できるのは、「私たちの世界」。「イオマンテ」と呼ばれるクマの霊を神の国に送る伝統儀式で、樺太アイヌが使っていた祭具を再



「私たちの世界」の展示の一部。左奥に見えるのが高さ5mのクマをつなぐ杭

現したクマをつなぐ杭は、5 mもの高さがあります。イオマンテのときにカムイの土産として祭壇に置かれる「イモカシケ」、木の表面を削ってつくり出す祭具のイナウの数々など、アイヌの世界観を象徴する展示物が並びます。

「私たちの交流」では、厚岸町の厚岸湖で1987年に発見された板綴舟いたとじぶねが展示されています。板綴舟とは、丸木舟に板を綴じて、船の側面を高くした舟。この舟により、より広範囲な交流ができるようになったといわれています。

このほか『アイヌ神謡集』を編さんした知里幸恵の貴重な史料が並ぶ「私たちのことば」、今を生きるアイヌの人たちの仕事をパネルで紹介している「私たちのしごと」など、約700点が展示されています。

新型コロナウイルス感染症対策のため、しばらくは休止となりますが、「イケレウシ テンパテンパ」という探究展示も準備されています。実際に触れるユニットを使って体験しながらアイヌ文化を学ぶことができるコーナーで、動物の仕掛けわなの仕組みなど、いろいろなテーマをわかりやすく紹介しています。ぜひ親子で体験してほしい展示です。

博物館では、このほかに開館記念特別展「サスイシリ 私たちが受け継ぐ文化～アイヌ文化を未来へつなぐ～」が11月8日（日）まで開催されています。この特別展では、これまで継承されてきた技術や感性を引き継いで、現在活躍している作家や担い手などの個人と団体に焦点を当て、「民具の継承」、「アイヌ語の継承」、「芸能の継承」、「現在の継承者」「現代の匠 優秀工芸師」の5つの分野で作品などを紹介しています。



国立アイヌ民族博物館では開館記念特別展も開催中

民具の継承では、5月31日に北海道放送（TBS系列）の『情熱大陸』で紹介された木彫家、貝澤徹さんの作品

「アペフチカムイ」が展示されているほか、アイヌ語の継承では、萱野茂さんを中心にアイヌ語の復興や継承活動などが紹介されています。

また、「現代の匠 優秀工芸師」では、（公社）北海道アイヌ協会が主催している「北海道アイヌ伝統工芸展」で、上位入賞を3回果たした優秀工芸師の方々の作品が展示されています。洗練されたデザインの作品は、民具や民族衣装のイメージを一新させる感性の高さが光ります。

博物館1階にあるミュージアムショップも必見です。しゃれたデザインの雑貨や小物など、来館の記念やお土産に、つい手に取ってしまいたくなるグッズが並びます。

さあ、ウポポイへ行ってみよう！

内覧会のコースには入っていませんでしたが、園内にはこのほかにも木彫や織り、刺しゅう、編み物などの手仕事の実演を見学できる工房、自然を観察しながら樹木にまつわる物語や植物の利用法などを案内してくれるプログラムもあります。

ウポポイの内覧会に参加して、歴史や伝統を生かしながら、洗練されたアイヌ文化が創造されてきていることを実感しました。また、スタッフの皆さんの温かいおもてなしの心にも触れることができました。

地域によって歴史や語り継がれている物語などは違いがあり、道内各地にあるほかのアイヌ関連施設や遺跡などを訪問してみたいとも思いました。エントランス棟のインフォメーションコーナーには道内のアイヌ関連施設が掲示されていますが、ひとくくりに考えるのではなく、アイヌ文化の多彩な地域差や歴史に目を向けるきっかけになっていくと感じました。

ウポポイは、それらの中核施設としての発信力があり、北海道観光の重要なコンテンツとしての役割も期待されています。

まずは、あなたもウポポイへ行ってみませんか。

※新型コロナウイルス感染症対策のため、入場は日付指定の予約制となっています。また、国立アイヌ民族博物館の観覧は、入場日の予約とは別にオンラインによる入館日時の予約が必要です。詳しくはホームページを確認してください。

※紹介したプログラム等は7月9日の内覧会で実施されたものとなっています。新型コロナウイルス感染症対策の状況変化によって変更になる可能性がありますので、ご了承ください。